

ツベルクリン反応既感染無所見者からの発病ならびに経過について

(第 1 報)

小 山 幸 男

財団法人労働結核研究会小松川大橋診療所長 (顧問 隈部英雄)

受付 昭和 33 年 12 月 1 日

緒 言

成人肺結核症のレ線学的発病がツベルクリン反応の陽転後早期に集積してみられることはすでに諸家により認められている (熊谷¹⁾, 千葉・所沢²⁾。

戦時中における千葉・所沢による国鉄職員についての観察ではツベルクリン反応 (以下ツ反と略) 陽転者の 16% が 1 年以内にレ線学的発病をみ、1 年半以後には発病をみなかつたが、最近ではツ反陽転発病が 6% と減少し、これと反対にツ反陽転後 2 年以後にもごく少数であるが発病がみられることは発病の様相がかわつてきているからだといわれる^{3) 4)}。ツ反陽転後長年無所見者として経過したものからの発病、いわゆる既感染無所見者よりの発病が最近健康管理の立場から問題となつてきた。たとえば近江⁵⁾ の富士銀行職員についての観察では昭和 28 年から 31 年までに、年間新発生療養者のうち既感染無所見者よりの発病者の占める率が 34.5%, 33.3%, 55.5%, 61.7% と年々高率となつている。駒野⁶⁾ も同様の数字を発表しているように、ツ反陽転者が多数を占めている集団の健康管理では既感染無所見者よりの発病の問題が重要視されてきた。

著者はツ反陽転後無所見で少なくとも 2 年以上経過したのち発病した者のレ線学的発病をさかのぼつて追求し、ツ反陽転時より発病までの期間、病巣の部位、病型、病巣の拡り、大きさの関連を検討し、あわせてこれら発病者の発病以前のレ線写真をみなおして微細病変の有無、骨との重りによる見落しの有無等を検討し、病巣に加療した場合の経過について観察検討したので報告する。

調査対象および研究方法

調査対象は昭和 26 年から 33 年にいたる間に結核予防会結核研究所の委託病棟に入所した患者のうち、健康管理医によりツ反陽転期の確認されたもの、および問診により把握された者、ならびに著者が健康管理をしている東京海上火災の社員でツ反陽転期の確認された者である。金光¹⁰⁾ の問診による信頼度の調査成績の結果から対象をツ反陽転確認群とツ反陽転問診群の 2 群にわけて

調査した。

前者が 70 人、後者が 100 人で、両群とも年 1~3 回直接撮影かあるいは年 2 回以上 6×6 判間接撮影でツ反陽転後から発病までの経過を観察したもので、直接撮影の観察例 45 人、6×6 判間接撮影の観察例は 125 人である。

- 1) 病型は学研分類を採用した。
- 2) 病巣の拡りは 1 区域以内、3 区域以内、1 側肺以内、1 側肺以上の 4 分類とした。
- 3) 最大病巣の大きさは、0~4 mm, 5~9 mm, 10~19 mm, 20~39 mm, 40 mm~ の 5 分類とした。
- 4) 空洞の有無は断層撮影を実施して確認した。
- 5) 空洞の内径の大きさは最大病巣の大きさに同じ。
- 6) ツ反陽転後発病するまでの期間は少なくとも 2 年間ツ反陽転後無所見で経過したものを対象として次のように分類した。2~2.5 年, 2.5~3 年, ~4 年, ~5 年, ~6 年, ~7 年, ~8 年, ~9 年, ~10 年, 10 年~。
- 7) 治療開始後加療後病型に到達した治療期間は次のごとく分類した。3 カ月~, 6 カ月~, 9 カ月~, 12 カ月, 18 カ月~, 24 カ月~。
- 8) 結核菌検索の対象は 170 人中 161 人で治療前に塗抹、培養検査を型のごとく実施し (小川培地) 両者とも陰性の場合には胃液培養も実施した。検査成績は塗抹培養とも陽性の場合には塗抹陽性とした。培養検査を数回実施した場合、1 回でも陽性となつた場合は陽性として取扱つた。

成 績

- 1) 発病時年齢と性別、病型分類について
発病時年齢は表 1 に示したように、20~24 才が最も多く 45.8%, ついで 25~29 才の 27.0%, 次に 30~34 才が 12.4% で、29 才未満が 77.5% で比較的若年層が圧倒的に多かつた。性別では男子が 115 人、女子は 55 人であつた。
病型は B 型が最も多く 83 人 48.8%, 次に Kb 型 54 人 31.8%, Ka 型 17 人 10%, Ple 型 7 人 4.1%, Kd 型 5 人 2.9%, A, C, E, Kc 型各型は 1 人であつた。

表1 発病時年齢と性別, 病型分類 (学研分類)

年齢	病型		A	B	C	E	Ka	Kb	Kc	Kd	Ple	小計	計
	性別												
~19	♂				1		1	2				4	8 4.7
	♀		3				1					4	
20~24	♂			21			4	14			4	43	78 45.8
	♀			23			2	7	1	1	1	35	
25~29	♂		1	17			3	13			1	35	46 27.0
	♀			8			1	1		1	11	11	
30~34	♂			4			2	10			2	18	21 12.4
	♀			1				1		1	3	5	
35~39	♂			4		1	2	3				10	12 7.1
	♀			1				1			2	2	
40~44	♂			1								1	1 0.6
	♀												
45~49	♂						1	2			1	4	4 2.4
	♀												
50~	♂												
	♀												
小計	♂		1 0.9	47 40.9	1 0.9	1 0.9	13 11.3	44 39.2		3 2.6	5 4.5	115 67.6	170 100 ↑
	♀			36 65.5			4 7.3	10 18.2	1 1.8	2 3.6	2 3.6	55 32.4	
計			1 0.6	83 48.8	1 0.6	1 0.6	17 10.0	54 51.8	1 0.6	5 2.9	7 4.1	170 100	

下記数字は %

表2 ツ反陽転後発病するまでの期間と病型 (ツ反陽転確認群)

病型	期間										計	
	2~2.5年	2.5~3	~4	~5	~6	~7	~8	~9	~10	10~		
A												
B	6(2)		8(5)	6(3)	1(1)	4(2)	2	1(1)	1(1)	3(3)	34(19) 48.6	
C												
E				1(1)							1(1) 1.4	
Ka	1(1)		1(1)		2(2)		1(1)				5(5) 7.2	
Kb	1	2(1)	3(3)	4(3)	3(3)		1(1)	3(3)	2(2)	4(4)	25(20) 32.8	
Kc					1						1 1.4	
Kd					1			1(1)			2(1) 2.9	
Ple				1	1(1)			2(2)			4(3) 5.7	
計	34				29							
	8(3) 11.5	2(1) 2.9	12(9) 17.1	12(7) 17.1	11(7) 15.7	4(2) 5.7	4(2) 5.7	7(7) 10.0	3(3) 4.3	7(7) 10.0	70(49) 100 ↑	

() は 6×6 半観察例, 下記数字は %

2) ツ反陽転後発病するまでの期間ならびに病型

表2に示すようにツ反陽転確認群70人中ツ反陽転時より2~2.5年後8人11.5%で, 2.5~3年後2

人2.9%, ~4年後, ~5年後がそれぞれ12人17.1%, ~6年後が11人15.7%, ~7年後, ~8年後がそれぞれ4人5.7%で, ~9年後7人10%, ~10

1959年5月

年後3人4.3%，10年以上後7人10%であつた。

2~5年後は34人で内訳はB型20，E型1，Ka型2，Kb型10，Ple型1人で，5~10年後は29人で内訳はB型9，Ka型3，Kb型9，Kc型1，Kd型2，Ple型3人，10年後以上が7人で病型はB型3，Kb型4人であつた。

ツ反陽転問診群は表3のごとく100人でツ反陽転時より2~2.5年後，~4年後がそれぞれ5人5.0%で~5年後，~6年後がそれぞれ7人7.0%で~7年

後4人4.0%，~8年後7人7.0%，~9年後11人11%，~10年後8人8%，10年以上後が46人46%であつた。

2~5年後が17人で内訳はA型1，B型9，C型1，Ka型1，Kb型4，Kd型1人で，5~10年後は37人でB型19，Ka型4，Kb型10，Kd型1，Ple型3人で，10年以上後がツ反陽転確認群よりも多く46人で内訳はB型21，Ka型7，Kb型17，Kd型1人であつた。

表3 ツ反陽転後発病するまでの期間と病型(ツ反陽転問診群)

病型	期間										計	
	2~2.5年	2.5~3	~4	~5	~6	~7	~8	~9	~10	10~		
A				1(1)							1(1)	1(1)
B	2(2)		3(1)	4(2)	5(4)	1(1)	4(2)	3(3)	6(5)	21(18)	49(54)	1.0
C				1							1	1.0
E												
Ka			1(1)			2(1)		2(2)		7(5)	12(9)	12.0
Kb	2(1)		1	1(1)	1(1)	1(1)	2(1)	5(5)	1(1)	17(17)	31(28)	31.0
Kc												
Kd	1(1)						1(1)			1(1)	3(3)	3.0
Ple					1			1(1)	1(1)		3(2)	3.0
計	5(4) 5.0	17 5(2) 5.0		7(4) 7.0	7(5) 7.0	4(3) 4.0	7(4) 7.0	11(11) 11.0	8(7) 8.0	46(37) 46.0	100(76)	← 100 ↑

()は6×6判観察例，下記数字は%

表4 陽転時年齢とツ反陽転後発病するまでの期間(ツ反陽転確認群)

年齢	期間										計	
	2~2.5年	2.5~3	~4	~5	~6	~7	~8	~9	~10	10~		
~9					1(1)						1(1)	1.4
10~14			1(1)	1(1)				1(1)	2(2)	1(1)	6(6)	8.6
15~19	5(1)	1	5(2)	4(1)	7(4)	2	3(1)	1(1)		3(3)	31(13)	45.3
20~24	2(1)	1(1)	3(3)	4(2)	2(2)	1(1)	1(1)	3(3)		3(3)	20(17)	28.4
25~29			1(1)	2(2)	1				1(1)		5(4)	7.2
30~34	1(1)		2(2)	1(1)		1(1)		1(1)			6(6)	8.6
35~39												
40~								1(1)			1(1)	1.4
計	8(3) 11.5	2(1) 2.9	12(9) 17.1	12(7) 17.1	11(7) 15.6	4(2) 5.7	4(2) 5.7	7(7) 10.0	3(3) 4.3	7(7) 10.0	70(49)	← 100 ↑

()は6×6判観察例，下記数字は%

3) ツ反陽転時年齢とツ反陽転後発病するまでの期間
表4, 5に示すようにツ反陽転確認群では陽転2年以後に発病してきた者のツ反陽転時年齢をみると，15~19才が31人43.3%でもつとも多く，ついで20~24才20人28.4%，次に10~14才，30~34才がそれぞれ6人8.6%で15~24才に陽転したものが多数を占めていた。

ツ反陽転問診群も表5に示すように15~19才が40

人40%，10~14才が30人30%，20~24才14人14%でツ反陽転確認群同様若年陽転者に高率であつた。

4) 病巣の部位について

1) 病型と左右肺区域との関係

これらの対象からPle型は除いた。

両側に病巣のある場合は左右各側に1例として取扱つた。

表 5 陽転時年齢とツ反陽転後発病するまでの期間 (ツ反陽転問診群)

年齢	期間										計	
	2~2.5年	2.5~3	~4	~5	~6	~7	~8	~9	~10	10~		
~9											7(6)	77 % 7(6) 7.0 30(21) 30.0 40(31) 40.0
10~14				1		3(2)	1	3(3)	4(4)	18(12)		
15~19	3(3)		3(1)	3(2)	6(4)		4(3)	5(5)	3(2)	12(10)		
20~24			1	3(2)	1(1)	1(1)	1	2(2)	1(1)	5(5)	14(11)	14.0 5(4) 5.0 2(2) 2.0 1(1) 1.0 1(1) 1.0 100(76) ← 100 ↑
25~29	2(1)						1(1)			2(2)		
30~34								1(1)		1(1)		
35~39										1(1)		
40~			1(1)									
計	5(4) 5.0		5(2) 5.0	7(4) 7.0	7(5) 7.0	4(3) 4.0	7(4) 7.0	11(11) 11.0	8(7) 8.0	46(37) 46.0		

() は 6×6 判観察例, 下記数字は %

表 6 病型 (学研分類) と左右肺区域との関係 (ツ反陽転確認群)

病型	区域		S ₁	S ₁₊₂	S ₂	S ₃	S ₄	S ₆	S ₈	S ₉	S ₁₀	全肺野	計
	左	右											
A	右												
	左												
B	右	8(5)		9(5)	2	2(1)							21(11)
	左		11(6)		3(2)	1							15(8)
E	右											1(1)	1(1)
	左											1(1)	1(1)
Ka	右				1(1)			1(1)					2(2)
	左		3(3)										3(3)
Kb	右	2(2)		4(2)			2(2)						8(6)
	左		10(10)		3(2)		1(1)		1				15(13)
Kc	右	1											1
	左		1										1
Kd	右	1(1)									1		2(1)
	左		1(1)										1(1)
小計	右	12(8)		15(7)	3(1)	2(1)	2(2)	1(1)		1	1(1)		35(21) 49.2
	左		26(19)		6(5)	1	1(1)		1		1(1)		36(26) 50.8
計		12(8)	26(19)	13(7)	9(6)	3(1)	3(3)	1(1)	1	1	2(2)		71(47)
		16.9	36.6	18.4	12.7	4.2	4.2	1.4	1.4	1.4	2.8		← 100 ↑
		上葉 61		85.9 %		中葉 2							

() は 6×6 判観察例, 下記数字は %, 両側例 5 例は左右に各 1 例として取扱った

表 6 に示すようにツ反陽転確認群は 71 例中右が 35 例, 左が 36 例でほぼ同数であった。

区域別では S₁ 12 例, S₁₊₂ 26 例, S₂ 13 例, S₃ 9 例で右 3 例, 左 6 例であった。

上葉は右 28 例 80 %, 左 33 例 91.5 % で上葉が

圧倒的に多かつた。上葉の主なる病型は左右とも B 型, Kb 型であった。

ツ反陽転問診群は表 7 に示すように両側に病巣のあつた 5 例を左右に各 1 例として取扱つたから 102 例で右が 61 例 59.8 %, 左 41 例 40.1 % でほぼ同数

表7 病型(学研分類)と左右肺区域との関係(ツ反陽転問診群)

病型	区域		S ₁	S ₁₊₂	S ₂	S ₃	S ₄	S ₆	S ₈	S ₉	S ₁₀	全肺野	計
	右	左											
A	右	左	1(1)										1(1)
B	右	左	17(10)	14(9)	8(7)	3(1)	1(1)	2(2)		1	1(1)		31(21) 18(12)
C	右	左			1								1
Ka	右	左	9(9)	2(2)	4(2)	2(2)		2(1)	1(1)				9(8) 5(4)
Kb	右	左		14(13)	4(4)	2(2)	1	2(2)			1(1)		16(16) 18(16)
Kc	右	左											
Kd	右	左			3(3)								3(3)
小計	右		27(20)	54(88.5%)		26(18)	7(5)	1(1)	4(3)	1(1)		1(1)	61(49) 59.8
	左			30(27)	35(85.4%)		4(3)	1	3(3)	1(1)	1	1(1)	41(32) 40.1
計			27(20)	30(27)	20(18)	11(8)	2(1)	7(6)	2(2)	1	2(2)		102(81)
			26.5	29.4	19.7	10.9	1.9	6.9	1.9	0.9	1.9		← 100 ↑
			上葉 89 (89.0%) 中葉 1										

()は6×6判観察例, 下記数字は%, 両側肺5例は左右に各1例として取扱った

表8 ツ反陽転後発病するまでの期間と部位(ツ反陽転確認群)

区域	期間										計
	2~2.5年	2.5~3	~4	~5	~6	~7	~8	~9	~10	10~	
S ₁			2	1	2	1		1		3	10 15.4
S ₁₊₂	3	1	8	3	3	1	3	2	1	3	28 45.2
S ₂	2	1	1	5		1			1	1	12 18.4
S ₃	2			1	2		1				6 9.3
S ₄	1					1			1		3 4.6
S ₆			1		1			1			3 4.6
S ₈					1						1 1.5
S ₉								1			1 1.5
S ₁₀					1						1 1.5
計	8	2	12	10	10	4	4	5	3	7	65
	12.3	3.4	18.4	15.4	15.4	6.1	6.1	7.6	4.6	10.7	← 100 ↑

下記数字は%(Ple.Eを除く)

であつた。

区域別では S₁ 27例 26.4%, S₁₊₂ 30例 29.4% S₂ 20例 19.6% で S₃ は 11例 10.8% で右 7例, 左 4例であつた。S₄ は右 2例 2.0% であつた。

右上葉は 54例 88.5%, 左上葉が 35例 85.4% でツ反陽転確認群同様に上葉が大多数であつた。

左右上葉の主なる病型は B型, Kb型, Ka型であつた。

表 9 ツ反陽転後発病するまでの期間と部位 (ツ反陽転問診群)

区域	期間										計
	2~2.5年	2.5~3	~4	~5	~6	~7	~8	~9	~10	10~	
S ₁	2		2	3		2	3	1	1	11	25
S ₁₊₂	1		1	2	2		2	3	4	15	25.6
S ₂	1		1	2	1		2	2	1	8	30.5
S ₃					2	1		2		6	18.5
S ₄	1									1	11.6
S ₆			1		1			1	1	3	7
S ₈						1				1	7.1
S ₉										1	2
S ₁₀				1							2.2
計	5		5	8	6	4	7	9	7	46	97
	5.1		5.1	8.2	6.1	4.6	7.1	9.3	7.1	47.4	← 100 ↑

下記数字は % (Ple を除く)

ロ) ツ反陽転後発病するまでの期間と部位との相関関係

これらの対象から Ple 型は除いた。

両側に病巣のある例は主病巣のみの区域を対象とした。

ツ反陽転確認群は表 8 に示すように S₁ は 10 例のうちツ反陽転後 2~5 年後に発病したもの 3 例, ~10 年後に 4 例, 10 年以上後に 3 例が発病した。S₁₊₂ は 28 例中 2~5 年後に 15 例, ~10 年後に 10 例, 10 年以上後に 3 例発病した。S₂ は 12 例中 2~5 年後に 9 例, ~10 年後に 2 例, 10 年以上後に 1 例発病し, S₄ は 3 例中 2~5 年後に 1 例, ~10 年後に 2 例が, 下葉は 6 例中 2~5 年後に 1 例, ~10 年後に 5 例発病した。

ツ反陽転問診群では表 9 に示すように, S₁ は 25 例中ツ反陽転後 2~5 年後に 7 例, ~10 年後に 7 例, 10 年以上後に 11 例発病した。

S₁₊₂ は 18 例中 2~5 年後が 4 例, ~10 年後が 6 例, 10 年以上後が 8 例で, S₃ は 11 例中 2~5 年後がなく ~10 年後が 5 例, 10 年以上後が 6 例, S₄ は 2 例中 2~5 年後 1 例, 10 年以上後に 1 例, 下葉は 11

表 10 病型 (学研分類) と拡りの関係 (ツ反陽転確認群)

病型	拡り								計
	A	B	C	E	Ka	Kb	Kc	Kd	
1区域以内		20			4	19		1	44
3区域以内		14			1	4		1	66.7
1側肺以内							1		20
1側肺以上				1					30.3
計	34	54		1	5	23	1	2	115
	51.6			1.5	7.6	34.8	1.5	3.1	100

下記数字は % (Ple 4 例を除く)

表 11 病型 (学研分類) と拡りの関係 (ツ反陽転問診群)

病型	拡り								計
	A	B	C	E	Ka	Kb	Kc	Kd	
1区域以内		32	1		10	16		3	62
3区域以内	1	15			2	14			64.0
1側肺以内		2				1			32
1側肺以上									33.0
計	1	49	1		12	31		3	97
	1.1	50.5	1.1		12.3	32.0		3.0	100

下記数字は % (Ple 3 例を除く)

例中 2~5 年後が 2 例, ~10 年後が 4 例, 10 年以上後が 5 例発病した。

5) 病型と拡りについて

ツ反陽転確認群では表 10 に示すように Ple 型 4 例を除いた 66 例中 44 例 66.7 % が 1 区域以内, 20 例 30.3 % が 3 区域以内, 1 側肺以内 1 側肺以上はそれぞれ 1 例で Kc 型, E 型である。

病型別にみると B 型は 34 例中 20 例が 1 区域以内, 14 例が 3 区域以内であった。Ka 型は 5 例中 4 例が 1 区域以内, 1 例が 3 区域以内, Kb 型も 23 例中 19 例が 1 区域以内, 4 例が 3 区域以内であった。

ツ反陽転問診群は表 11 に示すように Ple 型 3 例を除いた 97 例中 62 例 64.0 % が 1 区域以内, 32 例 33.0 % が 3 区域以内, 3 例 3 % が 1 側肺以内であった。

病型別では B 型は 49 例中 32 例が 1 区域以内, 15 例が 3 区域以内, 2 例が 1 側肺以内で, Ka 型は 12 例中 10 例が 1 区域以内, 2 例が 3 区域以内, Kb 型は 31 例中 16 例が 1 区域以内, 14 例が 3 区域以内で 1 例が 1 側肺以内であった。

6) 病型と最大病巣の大きさについて

表 12 病型 (学研分類) と最大病巣の大きさとの関係 (ツ反陽転確認群)

病型 大きさ	病型								計
	A	B	C	E	Ka	Kb	Kc	Kd	
0~4 mm		2		1					3
5~9		10			1	1			12
10~19		18			4	16		1	18.2
20~39		3				6	1	1	39
40~		1							11
計		34		1	5	23	1	2	66↑
		51.5		1.5	7.6	34.8	1.5	3.1	100←

下記数字は % (Pl 4 例を除く)

表 13 病型 (学研分類) と最大病巣の大きさとの関係 (ツ反陽転問診群)

病型 大きさ	病型								計
	A	B	C	E	Ka	Kb	Kc	Kd	
0~4 mm		5							5
5~9		14				1			15
10~19		22			10	16		3	51
20~39		8	1		1	14			24
40~	1				1				2
計	1	49	1		12	31		3	97↑
	1.1	50.5	1.1		12.3	32.0		3.0	100←

下記数字は % (Pl 3 例を除く)

表 14 BCG 接種の有無と病型との関係 (ツ反陽転確認群)

BCG 有無	病型									計
	A	B	C	E	Ka	Kb	Kc	Kd	Ple	
有	8			2	10	1			4	25
	23.6			40.0	43.5	100			100	35.8
無	26		1	3	3		2			45
	76.4		100	60.0	56.5		100			64.2
計	34		1	5	23	1	2	4		70
	100↑		100↑	100↑	100↑	100↑	100↑	100↑		100↑

下記数字は %

ツ反陽転確認群では表 12 に示すように 66 例中 3 例 4.5 % が 0~4 mm, 12 例 18.2 % が 5~9 mm, 39 例 59.1 % が 10~19mm, 12 例 18.2 % が 20~39mm で大半が 10~19 mm の大きさであった。

病型別では B 型は 34 例中 18 例 10~19 mm, 10 例が 5~9 mm, 3 例が 20~39 mm で 30 例が 19mm 以下の大きさであった。Ka 型は 5 例中 4 例が 10~19 mm, Kb 型は 23 例中 16 例が 10~19 mm, 6 例が 20~39 mm の大きさであった。

ツ反陽転問診群は表 13 に示すように 97 例中 51 例

表 15 BCG 接種の有無と病型との関係 (ツ反陽転問診群)

BCG 有無	病型									計
	A	B	C	E	Ka	Kb	Kc	Kd	Ple	
有		16			3	1			1	21
		72.7			25.0	3.2			33.0	21.0
無	1	33	1		9	30		3	2	79
	100	67.3	100		75.0	96.8		100	67.0	79.0
計	1	49	1		12	31		3	3	100
	100↑	100↑	100↑		100↑	100↑		100↑	100↑	100↑

下記数字は %

表 16 BCG 接種の有無とツ反陽転後発病するまでの期間

BCG 有無	期間					計
	2~5年	~8	~10	10~		
ツ確認 反陽 転群						
有	11	6	5	5	27	
	40.7	22.3	18.5	18.5	100←	
無	23	13	4	3	43	
	53.5	30.2	9.3	7.0	100←	
ツ問 反陽 転群						
有	3	8	5	3	19	
	15.8	42.1	26.3	15.8	100←	
無	14	10	15	42	81	
	17.2	12.5	18.4	51.9	100←	

下記数字は %

表 17 発病時より空洞化までの期間と病型

病型	期間					計
	同時	~15日	~1ヵ月	~3	~6	
Ka	13			3	1	17
Kb	48		2	1		51
Kc	1					1
Kd	4					5
計	66	2	1	4	1	77
	85.7	2.6	1.3	5.2	1.3	100←

下記数字は %

52.5 % が 10~19 mm, 24 例 24.8 % が 20~39 mm, 15 例 15.5 % が 5~9 mm で大半が 10~19 mm でついで 20~39 mm の大きさであった。

病型別では A 型は 40 mm 以上, B 型は 49 例中 22 例が 10~19 mm, 14 例が 5~9 mm, 8 例が 20~39 mm, 5 例が 0~4 mm の大きさであった。Ka 型は 12 例中 10 例が 10~19 mm で, Kb 型は 31 例中 16 例が 10~19 mm, 14 例が 20~39 mm で Kd 型は 3 例がすべて 10~19 mm の大きさであった。

7) BCG 接種の有無と病型について

ツ反陽転確認群では表 14 に示すように BCG 接種ありが 25 例 35.8%, なしが 45 例 64.2% で病型別では B 型は 34 例中 26 例 76.4%, Ka 型は 5 例中 3 例 60%, Kb 型は 23 例中 13 例 56.5% が BCG 接種なしで BCG 接種ありよりも高率であつた。ツ反陽転問診群は表 15 に示すように 100 例中 BCG 接種有が 21 例 21% で無が 79 例 79% であつた。病型別では B 型 49 例中 33 例, Ka 型は 12 例中 9 例, Kb 型は 31 例中 30 例が BCG 接種無で率は 75% から 96.7% でツ反陽転確認群よりも高率であつた。

しかし表 16 に示すように BCG 接種の有無とツ反陽転後発病するまでの期間との関係には BCG の影響はみられなかつた。

8) 空洞について

イ) 空洞化までの期間と病型について

空洞例は表 17 に示すように全例 170 例中 77 例 44.9% であつた。Ka 型が 17 例 22.1%, Kb 型 54 例 70.1%, Kd 型 5 例 6.5% で Kc 型が 1 例であつた。

表 18 空洞 (学研分類) と空洞内径との関係

病型 \ 大きさ	0~4 mm	5~9	10~19	20~39	計
Ka	5	15	1		17 22.1
Kb	12	36	6		54 70.1
Kc				1	1 1.3
Kd	4	1			5 6.5
計	19 24.7	50 64.9	7 9.1	1 1.3	77 100 ↑

下記数字は %

空洞化までの期間は新発見と同時に病巣がすでに空洞化していたものが 77 例中 66 例 85.7%, 新病巣発見後 1 カ月以内で空洞化したもの 2 例, 3 カ月以内が 1 例, 6 カ月以内が 4 例, 12 カ月以後に空洞化したものが 3 例であつた。

各病型とも新病巣発見と同時にすでに空洞化しているものが大多数であつた。

ロ) 空洞の大きさについて

上記空洞の大きさは表 18 に示すように 77 例中内径

表 19 病型と排菌 (発病時)

病型	A	B	C	E	Ka	Kb	Kc	Kd	Ple	計
喀痰										
塗抹陽性	1	1		1	2	9				14
培養陽性		28			5	30	1	1	1	63
計	1 100	29 36.2		1 100	7 41.1	39 75.0	1 100	1 25.0	1 25.0	80 49.6
検査人数	1 100 ↑	80 100 ↑	1	1 100 ↑	17 100 ↑	52 100 ↑	1 100 ↑	4 100 ↑	4 100 ↑	161 100 ↑

下記数字は %

5~9 mm が 50 例 64.9%, 0~4 mm が 19 例 24.7% で大多数は 9 mm 以下のものであつた。

9) 結核菌検索について

結核菌検索は病巣発見時に実施した成績で治療前の排菌状態である。

成績は表 19 に示すように検索例 161 例中菌陽性が 80 例 49.6% で, そのうち塗抹陽性が 14 例, 培養陽

性が 66 例であつた。

病型別では Kb 型の陽性率が 75.0%, Ka 型が 41.1%, B 型 36.2%, A, E, Kc 型は各型それぞれ 1 例であるがすべて陽性であつた。加療後は全例陰性化した。

(文献は第 2 報に掲載予定)